

# 花の歌 歳時記

前田康子

子どもの頃は どうしてあんなに寒かったの  
だろう。手がかじかんで、蛇口がひねられな  
かった朝、帰宅して鍵が開けられなかった夕  
暮れ。はああつと息を吹きかけてこするとか  
ろうじて手が温もる。

手袋をつけると、手だけが今でも、子ども  
の頃の表情をしている。手袋をつけて外へ出  
る安心感。手袋を忘れた日の心細さも子ども  
のときのままである。

母は、私がなくすといけないと、いつまで  
も右手と左手をつなぐ紐をつけていて、それ  
が恥ずかしかった。ドラえもんをついた赤い  
手袋。母が作ってくれたミトンの形の手袋。  
兄がバレンタインの目にもらってきた手袋。  
初めて自分で編んだ不格好な手袋。いろんな  
手袋を思い出す。

窮屈そうな皮の手袋を、母は大事に持って  
いて、それしかなかった。おこづかいをた  
めて買ってあげるよといったら、こんなに暖  
かいからと手を握ってくれた。



絵・ナンテンノ小柳吉次

## 八つ手

八つ手の花に面白い名前をつけたのが仏文学者の杉本秀太郎氏だ。その名は「八手冬蔵」。質屋の番頭さんの名前のイメージでつけたという。それを知ってから、私は八つ手の花を見かけると「あつ冬蔵さん」と呟く。

窓の外に白き八つ手の花咲きてこころ寂しき冬は来にけり

島木赤彦『水魚』

葉が八つの指のように分かれているから八つ手というが、実際に分かれ方は、七つから九つの間でまちまちである。花は白く、蜜が光っているように見える。そこへ生き残っている蠅や虻が毎日のようにやってくる。普段は見ないそんな虫達も、生き物の動かない冬の真昼、じつと眺めてしまうことがある。

ただ青き八手団花鐸のことかざしつ路地のこどもらあそぶ

田谷 鋭『波濤遠望集』

八つ手の花をきり刻み皿に盛りてをり幼子はかくてひととき遊ばむ

木俣 修『冬曆』

八つ手は別名テングノハウチハという。絵

本『だるまちゃんとしてんぐちゃん』では、だるまちゃんがてんぐちゃんの団扇をほしがって、八つ手の葉で満足する場面がある。子どもも身近なおもちゃだった。

この二つの歌のように、花で遊んでいる子は今ではあまり見かけない。丸い花の形が鈴を思わせる。それをもって遊んでいる子、ままごとの材料にしている子。

で  
や  
八つ手





## ポインセチア

地味な八つ手の花と対照的なのが、ポインセチアの赤である。赤いと思っているのは苞はく葉はとよばれる部分で、本当の花は小さくその真ん中にある。クリスマス前から、シクラメンとともに店頭に並べられる。仕事帰りの人々がほっとするような暖かい色である。

冬季鬱つられる日々に街角のポインセチアの赤ふかまりぬ

北沢郁子『夢違』

毎年十二月が来て、同じようにポインセチアが飾られて、華やいだ街を見るのに、自分だけが、どんどん街においていかれるような気分になる。それでも一度として同じ冬はな

かったのに。

街路樹の根元根元を照らしるしポインセチアもいつか抜かれぬ

三國玲子『農の雪』

花好きにもいろいろいて、園芸種はあまり好まないという人もあるが、ポインセチアがなかったら冬の町は、寂しい景色になるだろう。クリスマスが過ぎると飾られていた大量のポインセチアが一斉になくなる。一体どこへいつてしまうのか不思議だ。

保護色と思う心の色であるポインセチアの赤を着て会う

俵 万智『かぜのてのひら』

赤いセーターや赤いコートが無性に着たくなる時がある。この歌、本当は無意識のうちに暖かい色で、恋人を包んであげたかったのかも知れない。



ポインセチア

## 山茶花

山茶花は何色がいい？ 椿つばきは？ 花好きが集まって話し始めるとだんだんそんな話題になる。

雪の上にピンク色の花びらが散るのもいいが、やっぱり、山茶花は白がいい。身の引き締まるような冬の朝の、空気の冷たさに、山茶花の白さは似合う。まだ花が生き生きとしていても、すぐに散り始めてしまうのが山茶

花である。拾うとひやつとしていた花びらの冷たさ。

静かなる雨に散りたる山茶花の踏まれやすきを踏むなりわれも

伊藤一彦 海号の歌

花の形のまま落ちるのが椿、花びらが次々と散るのが山茶花。風や雨にあたり、生け垣の山茶花が散る道は花の少ない冬の日、ほっとできる道だ。眠く寒い朝を、通勤通学して

いく脚がその花びらを踏んで過ぎて行く。

山茶花の散りしくあたり用のなき鶏のごとく歩めりわれは

大西民子 印度の果実

山茶花は散っている所をよく詠まれる花である。何も目的なく、あたふた歩いている姿を「鶏のごとく」といった所がなんともおもしろい。

花かげに立ちよりみればすがらうなりは籠る山茶花の花に

尾山篤二郎 草籠

尾山篤二郎は十五歳のとき、結核のため、右足を切断した。その運命にも屈せず、数々の山の歌、旅の歌を残している。この歌は京都の宇治での一首。「すがら」とは蜂のこと。

人いゆき日ゆき月ゆく門庭の山茶花の花もちりつくしたり

佐佐木信綱 山と水と

よく見かける光景だが、まるで時間というものゝが形になって散って行ってしまうような歌。一年が終わり、またあたらしい年が私たちを待っている。

まえだ・やすこ 「塔」会員



かざんか  
山茶花